

2024年1月20日

『続 羊の歌』 講読会

「第二の出発」①

立命館大学 先端総合学術研究科
西澤忠志

書誌情報

『朝日ジャーナル』9巻33号(1967年8月6日):74-78頁
旧版(1968):45-55頁、新版(2014):51-62頁

本章の梗概

1951年11月に日本を出発し、フランスに滞在した最初の一年での体験を綴る。フランス到着直後に逗留した日本館を中心に、加藤は日本人留学生だけでなく、欧米の様々な人と出会った。特に「ブルターニュの青年」「米国の黒人画家」「ドイツ人の画家」「アメリカ人の技師」との出会いと対話は、言葉と文化との関係、信仰、恋愛などの概念の日本と西洋との違いを強く意識させるきっかけとなった。この時点で得た問題意識は、後年の「雑種文化」、『日本文学史序説』などの著作に結実することとなる。

・この章の全体の中での位置づけ

フランスに滞在した時期を取り上げた章(「別れ」まで)の中でも最初期に当たる
「第二の出発」…フランス留学中の「日本館」での同世代の人々との会話を中心

「詩人の家」…フランス留学中の「ルネ・アルコスの家」でのアルコスと彼の娘との会話を中心

凡例

・段落ごとに内容をまとめる際に、以下の段階を踏む

- ① 作品内世界での出来事の実事考証
- ② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造
- ③ 加藤周一の人生における意義

・以下の記号を、この意味で使用する

□ …発表者による補足

【】 …『朝日ジャーナル』版のみに書かれた記述

各段落のまとめ

第1段落（旧版45頁、新版51頁）

一九四五年の秋に、戦後日本の社会に向って出発した私は、五一年の秋に、西洋見物に出かけた。これが私の生涯における第二の出発になった。そのときの私の志は、日本社会のなかの、したがってまた私自身のなかの「西洋」を、その本来の場所において、自分の眼で見極めておきたいということであったろう。しかしもちろん、事は志とちがって、「西洋」は単に観察の対象ではなくなった。

① 作品内世界での出来事の事実考証

- 「五一年の秋に、西洋見物に出かけた」=1951年に第2回フランス政府給費留学生の自費留学生制度を用いて、医学研究生として渡仏

・文部省によるフランス政府給費留学生

自然・人文・芸術を専攻する94人が4月6日～5月30・31日の間に受験

6月14日に5名の合格者を発表、8月末日に渡仏、1年間の留学を予定¹

私費で留学を希望する者（「自費留学生制度」）にも、往復の旅費と滞在費などを負担するが、フランス政府給費留学生と同様の便宜を受けることができることが、合格発表後に公表²

フランス政府給費留学生試験には不合格したが、自費留学生制度を用いて渡仏

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 「一九四五年の秋に、戦後日本の社会に向って出発した私は、五一年の秋に、西洋見物に出かけた。」

・1945年秋（第一の出発³）…9月に上田から東京へ戻り、評論活動を始めたこと？

⇕

・1951年秋（第二の出発）…11月に東京からフランスへ出発

→「秋」を軸として、2つの「出発」を二項対照的に記述

- 「西洋見物」（「留学」ではない）

・「見物」という言葉…フランス帰国直後に発表した著作でも使用

「西洋見物の途中で考えた日本文学」「高みの見物について」（1954）

『ある旅行者の思想——西洋見物始末記』（1955）

「高みの見物について」

高みの見物ということばがある。ある社会のなかへ入ってゆかずに、外から大勢をみわたして眺めることをいうのだろう。社会のなかへ入れば、多かれ少なかれ一種の責任をもつことになる。またその社会のなかでの一つの立場をとることになる。高みの見物にはそれがない。無責任であり、特定の立場によらず、すべて

¹ 「フランス留学生決る」『毎日新聞』1951年6月15日3面、「仏留学五氏決る」『読売新聞』夕刊1951年6月14日2面

² 「砂原美智子さんら渡仏」『読売新聞』夕刊1951年8月10日3面

³ 加藤が、自分はよそ者であり、孤立した人間であることを自覚し、かつ社会的現象を全体的に把握しようとする方法を持った「十五年戦争」の時期を「第一の出発」とする解釈も存在する。

鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』（2018）352-353頁

の立場に対し公平な態度をとることができる。(……)たとえば私はフランスの社会をみて、そのなかでのごたごた議論しているフランス人の大部分よりも、ごたごた議論されている事柄の結着を早く正確にみとおせるように思う。たとえばいくさの結着、先の見透しというようなことだ。しかしかりに私の見透しが正確であるとして、私の見透しがフランスの社会にとっては何の役にもたたないということも考える。またただ役にたたないばかりでなく、私の見透しの正確さは、私の見透しの役にたたぬということ、そのことを前提としてなりたっていると考え。一般化していえば、高みの見物は正確な判断をあたえるが、その判断は役にたたぬ。たまたま役にたたぬのではなく、役にたたぬことそのことが、判断の正確の条件になっている。つまり事の本質上無益で正確な判断が高みの見物の結果だということになる。従ってもし私と社会との関係が、本来“解釈することが目的でなく、改造することが目的だ、”という原則にたっているとすれば、高みの見物ではこまる。たとえある場合には正確さをいくらか犠牲にしても、有益な判断、役にたつ判断を必要とするということになるだろう⁴。

→「見物」という言葉⁵…「決して当事者にはなれず、観察者あるいは傍観者として対象を考える」
「当事者ではなく観察者であるがゆえに、全体的に客観的に考えられる」

※こうした対象との「距離感」については、『羊の歌』でも言及されている。

→距離感を持ちつつ、全体を見渡そうとする態度が、「見物」という言葉に表されている。

● 「そのときの私の志は、日本社会のなかの、したがってまた私自身のなかの「西洋」を、その本来の場所において、自分の眼で見極めておきたいということであったろう。」

・なぜ西洋に括弧をつけたのか？

日本社会における実際の西洋へのイメージ（「西洋風」⁶）＋その中で育まれた加藤の西洋へのイメージ
＝日本社会のなかの、私自身の中の「西洋」≠実際の西洋

例：加藤が例示したフランスに対するイメージと実際

私は日本にいたときに、フランスは文化国で、そういう結構な国では、文化があらゆるところに浸透している。下宿のおかみさんでもヴァレリイをよんでいるなどという話をきいたが(……) 実地にそういうおかみさんを探してみると、ないことはないが、少い。大衆のあらゆるところに浸透しているのはヴァレリイでもアラゴンでもなくて、探偵小説であり、低能愚劣をきわめた新聞小説であり(……) アメリカ映画である⁷

・「西洋」を「見物」すること＝現地で自身の中の「西洋」イメージを客観的に見極めること
そのため、フランスだけではなく、イギリス、オーストリア、イタリアにも行く

③ 加藤周一の人生における意義

● 「しかしもちろん、事は志とちがって、「西洋」は単に観察の対象ではなくなった。」

・留学当初…医学研究を建前としつつ、「西洋」の「見物」のために渡航

・留学中の変化…「その国に一種の奥行きを感じ、いくらかでもその深さを測るためには、一年程度の滞在は準

⁴ 加藤周一「高みの見物について」『雑種文化』講談社 18-20 頁

⁵ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』（2018）352 頁

⁶ 加藤周一『ある旅行者の思想：西洋見物始末記』（1955）211 頁

⁷ 加藤周一『戦後のフランス：私が見たフランス』（1952）81 頁

備期間にしかすぎないだろう、と考えるようになった⁸⁾

→滞在期間を2年延長し、その結果「その国の言葉、その国の人々との関係、その風俗習慣や季節が、私のなかにしみこんで、積み重なり、相互に反応しながら、体質の一部をつくってゆく⁹⁾」=ものごとを見る際の視点の一つとして、西洋の価値観を受け入れることとなる

※日本・ヨーロッパを極端に理想化せずに相対的に見ることにもつながる

例：『私にとっての20世紀』（初版は2000年に刊行）での回想

ただ、その当時〔1950年代〕は、どちらかといえば、ヨーロッパ、米国が進んでいて日本は遅れているとか混乱しているとか、そういう考え方が一般には強かった。私はそうした風潮に乗らないように、必ずしもマイナスだけではないということをいおうという潜在的な気分はありました。それもフランス滞在で得た経験がきわめて大事でした。つまり、本で読んで得た知識と実際に生活した経験と、両方から見た西洋というものは極楽であるはずはないということです。どこの社会でもそうです。黒い面と白い面、利点と弱点と両方を感じる。圧倒的にヨーロッパだけがいいという考え方は克服されると思う。外国を知っていれば日本がナンバーワンとかなんとかいう幻想は生じようがない。私はそのときにかぎらず、戦後、外国で暮らしている間は日本で起こったことはよくはわからないわけですから、ずいぶんマイナスの面があるのだけれども、それにもかかわらず外国で暮らした経験というのは役に立ったと自分で思うことの一つは、日本のものは何もかも悪いという悲観主義に陥らないということです。外国のものも弱点はたくさんあるから、相対的な問題で日本の伝統は全部悪いという考えは克服できた¹⁰⁾。

第2段落（旧版45頁、新版51-52頁）

東京からの空の旅は早かった。私はオルリー空港からの自動車の窓にパリ市街の灯をはじめてみたとき、羽田へ向う自動車の窓外の街の灯を思い出していた。東京からそれほど遠く離れてきたということ、自分自身に納得させるのは、容易でなかった。「あれがセーヌ河ですよ」と迎えにきてくれた友人—それは私よりも一年まえに来ていた森（有正）さんと一カ月ばかりまえに着いていた三宅（徳嘉）君であった—の一人がいったけれども、私はセーヌ河よりも、漠然とはるかに遠い距離のことを考えていた。

① 作品内世界での出来事の実事考証

● 森有正（1911 - 1976）

フランス文学者、哲学者。東京出身。東京帝大卒。森有礼の孫。パスカル、デカルトなどの近世フランス哲学を専攻し、1950年東大助教授在職中に渡仏。1953年東大を辞してパリに定住し、国立東洋語学校、パリ大東洋学部で日本語、日本文化を講じる。1972年から4年間パリ日本館館長。『遙かなノートル・ダム』以下一連の著作で「経験」の意味を説いた。著作はほかに『パスカルの方法』『デカルト研究』『経験と思想』、エッセイに『バビロンの流れのほとりにて』など¹¹⁾。

⁸⁾ 加藤周一『続 羊の歌』157頁（旧版）、179頁（新版）

⁹⁾ 加藤周一『続 羊の歌』158頁（旧版）、180頁（新版）

¹⁰⁾ 加藤周一『私にとっての20世紀』岩波書店（2009）125-126頁

¹¹⁾ 「もり-ありまさ【森有正】」『日本人名大辞典』（JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>）, (参照 2024-01-13)

※加藤周一との関係

- ・戦時中に東大 YMCA で語り合う（「内科教室」）
- ・敗戦直後、同人誌（『方舟』）に掲載

● 三宅徳嘉（1917 - 2003）

フランス語学者。東京出身。東京帝大卒。1968年都立大教授、1978年学習院大教授。フランス言語学、フランス思想史を研究。『新スタンダード仏和辞典』『新和仏小辞典』などの編集にかかわった。訳書にデカルト『方法序説』など¹²。

（フランス政府給費留学生として1951年8月末に渡仏）

※加藤周一との関係

- ・フランスの哲学者コンディヤックの『感覚論』を共訳（1948）
- ・フランス留学から帰国後も、対談などのやりとりを通じて交友を続ける

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 「オルリー空港からの自動車の窓にパリ市街の灯をはじめてみたとき、羽田へ向う自動車の窓外の街の灯を思い出していた。」

→距離としては遠いが、外見的には近いという、加藤が感じた印象を表現

はじめてパリの街を見たときに、私は大都会というものはどこでも大同小異であると思い、一年の後東京へ戻るつもりでいた¹³。

→加藤が感じた、東京から遠く離れたことへの現実感の無さを表現？

東京からそれほど遠く離れてきたということ、自分自身に納得させるのは、容易でなかった。

→あるいは、滞在中に感じた日本とフランスとの生活の近さを踏まえての表現？

- ・根拠① 『戦後のフランス』でのパリ到着時の記述…『続 羊の歌』での記述とは異なる

二時間に足りない夜間飛行の後パリの燈火はその窓の闇のなかにわきあがってきたのだ。ネオンの赤や青はなく、白い光の粒が宝石の集まりのように輝き、実に美しい。はじめてみるパリは、大きな寺院のように、まず外から眺めて美しかった。なかへ入ると暗くてしばらくは何もみえぬだろう。しかしその暗さに慣れると焼得ガラスをとおして来る光が、外から見たときとは全く別の美しさを寺院の内部につくりだしているように、パリもまたその内側の美をみせてくれるかもしれない¹⁴。

- ・根拠② 帰国後に感じたヨーロッパでの生活で「全く新しい経験」だったこと

第一に、個人的な生活のあらゆる意味で、日本でのそれまでの生活と質のちがうものではなかったにもかかわらず、社会との関係が本質的にちがっていた¹⁵。

- 「私はセーヌ河よりも、漠然とはるかに遠い距離のことを考えていた。」

- ・セーヌ川

フランス北部、同国の心臓部であるイル・ド・フランス地方を潤し、首都パリを貫流するフランスの代表的

¹² 「みやげ-のりよし【三宅徳嘉】『日本人名大辞典』（JapanKnowledge）, <https://japanknowledge.com>, (参照2024-01-13)

¹³ 加藤周一『続 羊の歌』157頁（旧版）、179頁（新版）

¹⁴ 加藤周一『戦後のフランス：私が見たフランス』未来社（1952）5頁

¹⁵ 加藤周一『ある旅行者の思想：西洋見物始末記』（1955）211頁

河川。全長 776 キロメートルで、ロアール川に次ぐフランス第二の川である。流域面積 7 万 8650 平方キロメートルは全国土の約 7 分の 1 を占める。セヌ川はパリの地形や風景に大きな影響を与えている。南東方向からパリ市に入ったセヌ川は、中心部をほぼ東から西へ流れ、南西で市外へ流れ出たのち、南北に大きく蛇行する。中心部にはサン・ルイ島とシテ島の両川中島があり、シテ島はパリ発祥の地である。市はセヌ川を挟んで大きく右岸と左岸に分けられる。両岸と二つの川中島を結ぶ橋の数も多く、河岸は市民や観光客のかっこうの散策地となっている¹⁶。

・技術、ものとは異なる側面への興味→具体的な説明は次の段落で

第 3 段落 (旧版 45-46 頁、新版 52-53 頁)

しかしもちろん、その頃の旅客機で南廻り二日間の道中の記憶が、私にもものこっていなかったわけではない。香港のせまい街路の両側の窓から雨のように降りそそいでいた麻雀の牌の音、涯もなく広がる東南アジアの密林と深夜のカラチ空港、シリアの白い沙漠と死海、朝のペイルートの空港に黒眼鏡をかけて右往左往していた素姓の知れぬ男女の風俗、地中海の水の宝石のように輝く紺青、夕陽を浴びたマッターホルンの薔薇色の山頂……それらの鮮明で互いに何の関係もない印象は、私の頭のなかにみちていた。その印象のそれぞれには意味がありえたはずだろう。しかし同時にあたえられたその全体について、意味を考えることはできずがなかった。私は、むしろ、羽田で旅客機の座席に坐ったときからパリに到るまで一貫してただ一つの経験について考えていた。日本語によって意を通じることの不可能な世界。広島では、たしかに、米国人の医者として英語で話していた。しかしそれは日本語の世界のなかで、たまたま私が自分の考えを英語に訳していたにすぎず、周囲の世界の全体が、英語を媒介として、構成されていたのではない。旅客機のなかで、私はすでに、もしすべての考えを外国語で表現するほかはないとすれば、そのことは私の考えの内容にも影響をあたえずにはいないだろう、と感じはじめていた。日本語の考えを、必要に応じて訳しながら、暮すこともできる。しかしそれでは周囲の世界を内側から理解することにはならぬだろう。私がみずからそのなかに身をおいた世界は、それを解釈することが同時に私自身を変えることを意味し、私自身を変えずにその世界を解釈することはできないだろうという点で、そのときまで私の暮してきた世界と、根本的にちがうものである。羽田空港の滑走路に向って滑り出した旅客機の小さな窓から外の灯を見つめながら、私は窓の内側の世界と、外側の世界との断絶を感じていた。東京と私との距離は、そのとき一挙に極大に達したので、旅客機がパリに着陸し、入国の手続をすませて、私の乗った自動車が街を走り出したときに、少しでも大きくなったのではない……。

① 作品内世界での出来事の実事考証

- 1950 年代の東京 (羽田空港) - パリ (オルリー空港) 間の航空便
- ・東京→パリへの旅について

1951年11月4日未明発、同年11月5日夜着、所要時間は約50時間

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 東京→パリへの旅の中で考えた、「日本語によって意を通じることの不可能な世界。」

¹⁶ 高橋正「セヌ川」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(JapanKnowledge) ,<https://japanknowledge.com>, (参照 2024-01-13)

¹⁷ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』(2018) 352 頁

・きっかけ…広島でのアメリカ人の医者との会話…「広島」の章を参照
「日本語の世界」(日本人の考えていること・日本の出来事)を「アメリカ人の医者」に伝える
→既知である日本語・ものを英語にして相手に伝える

⇄

「日本語によって意を通じることの不可能な世界」で暮らす

→未知の言葉を解釈し、理解する必要がある

日本語の場合とは異なり、まず対象に対する理解が必要

・前提…言葉とその国の文化・思想とのつながりを認める考え方

サルトル¹⁸を読んだ経験から？

・「文学とは何か」(1950) [原題 *Qu'est-ce que la littérature?* 1948 出版]

「詩人にとって言語は、外的世界の一つの構造である。語る人は言語のなかで状況において (ce situation) ある、言葉に包圍されている。言葉は彼の感覚、聴や触覚や水晶体の延長である¹⁹。」

→言葉を、使う人の感覚の延長と捉える

● 羽田空港の滑走路に向って滑り出した旅客機の小さな窓から外の灯を見つめながら、私は窓の内側の世界と、外側の世界との断絶を感じていた。東京と私との距離は、そのとき一挙に極大に達したので、旅客機がパリに着陸し、入国の手続をすませて、私の乗った自動車が街を走り出したときに、少しでも大きくなったのではない……。

→「窓の内側の世界」…「日本語によって意を通じることの不可能な世界」を一貫して考えていた自身の内面？
窓の「外側の世界」…「日本語によって意を通じることの可能な世界」？

③ 加藤周一の人生における意義

● 「言葉」と文化・社会との関係への注目

例：「言葉と戦車」(1968)、「言葉と人間 (コラム)」(1975) など

三宅徳嘉との対談「言葉と文化」(1972)

言葉がどんどん変わっていくということは社会が変わっていくからで、社会が変わっていくということは、活発な若い生命力があって、それはたいへん積極的ないい面だと思うのです²⁰。

● 「言葉」をどう伝えるかへの関心

例：「都市・言葉・人間」(1973)

目下の仕事の中心は「朝日ジャーナル」連載中の『日本文学史序説』です。私が試みてるのは、日本の文学史を、日本語でも英語でも通じる、つまりすべての人に通じる世界へ引き出そうということです。

日本の文学史を日本語特有の修辞で書いていくのには限界があると私は考えています。ある言葉について語りうる言葉は、もうひとつ別の言葉でなければいけないでしょう。

¹⁸ サルトル (Sartre, Jean-Paul, 1905-1980) フランスの哲学者、作家。第二次世界大戦後に、無神論的実存主義とマルクス主義の総合を試みて、世界的な影響を及ぼした知識人でもある。

鈴木道彦「サルトル」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(JapanKnowledge), <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-01-13)

¹⁹ サルトル、加藤周一 (翻訳)「文学とは何か」『人間』6巻1号 (1950) 231頁

²⁰ 加藤周一・三宅徳嘉「言葉と文化」『新聞研究』248号 (1972) (『辞書、この終わりなき書物』151頁)

そこで私が心がけているのは、なるべく普遍的な概念を用いて、正確に書こうということです。明晰であることへの関心といえますね²¹。

→加藤の「言葉」への関心は、彼の文体や『日本文学史序説』にもひろがる

第4段落（旧版47-48頁、新版53-55頁）

パリで私が最初に住んだ部屋は、一四区の大学町にあった。大学町には多くの国が、自国の留学生のために寄宿舎を建てていて、そのなかに「日本館」もあり、私はその一部屋に住んだのである。その頃にはまだ日本人留学生の数が少かったから、「日本館」の学生の三分の二は、日本人ではなかった。三度の食事にはかなり離れた建物の中央食堂まで出かけ、そこには他の寄宿舎からも各国の学生たちが集ってきていたので、やがて私は「日本館」以外の学生とも知り合うようになった。しかしそのつき合いは、浅く表面的なものにすぎなかった。言葉が不自由であったということもある。しかしそれだけではなく、相手にとって不足だったということもある。私は同じ「日本館」に住んでいた三宅君や、街の下宿屋に住んでいた森さんと、日本語で話をすることができた。たとえ私がどれほど自由にフランス語を操ることができたとしても、同じ程度の知的刺激を二〇歳前後の留学生たちから期待することは、むずかしかったはずだろう。しかしもちろん例外もなかったわけではない。「日本館」に住んでまもなく、私はブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとりと知り合うようになった。彼はサン-ルイの島の古い建物と、サン・シモンの散文を愛し、ドビュッシーを聞き、ニーチェを読み、若くしてすでに孤高の風を備えようとしていた。「フランスの文化の質のなかには、貴族的なものがある、と思う」と彼はいったことがある。また同時に「バステューの牢獄を襲った民衆の伝統があるのだろう」と私はそのときにいった。そうして私たちは、深夜まで議論をつづけた。大学町の寄宿舎の部屋には、寝台と机と椅子が一つずつあるだけで、床には敷物がなく、壁には一枚の絵もかかっていなかった。机上には積み重ねた本と、一本のぶどう酒と、《ゴーロワーズ》の吸殻の溜った灰皿があって、それ以外の何もなかった。そのとき私は故意に議論を挑撥していたのではない。彼のものの考え方に興味をもち、みずから反対の立場をとることによって、相手の立場をはっきりさせようとしていたのだ。しかしそうするためには、みずからとった立場を弁護しなければならない。結果として私は一晩中、フランス語を喋り、相手の巧妙な言廻しを換骨奪胎して、自分の議論に応用しながら、不自由な言葉を何とか操ろうと努力せざるをえないことになった。それははじめのうち、ひどく骨の折れる仕事であった。しかし慣れるに従ってそれほど面倒でもなくなったのである。私はフランス語で話をすることができたから、論争をしたのではなく、論争をしたから、フランス語で――甚だ不器用にはあるけれども、とにかく意を通じることができるようになったのであろう。私はみずからそのことを感じていたし、そのことが何を意味するかも知っていた。周囲の世界と私との間の距離は、俄にせばまった。

① 作品内世界での出来事の事実考証

● 日本館 (Maison du Japon)

正式名称「パリ国際大学都市日本館－薩摩財団」。1925年に創設されたパリ大学をはじめとする首都圏の高等教育機関や研究機関に在籍する世界各国の学生や研究者に宿舎を提供し、あわせて文化・学術の交流を推進することを目的とした学術施設、パリ国際大学都市に位置する。日本古来の城廓を模した地上7階・半地下1階の建物は、フランス人建築家ピエール・サルドゥーが設計したもので、1929年に当時のフランス大統領などの臨席のもとに竣工式を実施。館の周囲は1825平米におよぶ日本庭園となっており、日本館の建物とあいまって大学都市

²¹ 加藤周一「都市・言葉・人間」『波』5月1日号（1973）42-43頁

の一遇に日本的な雰囲気醸し出す²²。

・加藤が留学した当時の「日本館」

3分の1の日本人が住む

(国際交流のために各国の寮は自国出身者を70%以下に抑えることが求められたため)

「中央食堂」は「日本館」から遠く離れたところにあるため各国の留学生・研究者との会話のきっかけに²³

● 「ブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとり」

・名前、在籍校など、詳細は不明

・しかし、同時期に加藤は「若いフランス人」と議論を交わしていた

例：「フランス人は相手を親切にするが、打ち解けることはない²⁴」ことについて「若いフランス人」と話し合う

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

● 「フランス文化」に関する議論

「ブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとり」…「フランスの文化の質のなかには、貴族的なものがある」

⇕

加藤…「バステューユの牢獄を襲った民衆の伝統があるのだろう」

→対立点…フランス文化の質を何に代表させるのか？

・敢えて対立する意見を出すことで、立場を明確にしようとする…二項対立を出す論法へ？

③ 加藤周一の人生における意義

● 対談、対話を後年も好んで行う…知的刺激をうけるため、自分の考えたこと・感じたことを伝えたいという強い願望²⁵

私は座談を好んで、演説を好まない。人の話を聞きながら、あるいは自ら喋りながら、考えることをよろこんで、人生意気に感じ、肝胆相照らすことを必ずしも貴ばない。意見はいくらちがう方が、話しながら考えるのに好都合である。しかしあまりちがいと、話が通じ難くて不便だと思う。幸いにして日本国の雑誌新聞放送には座談会・対談の独特の習慣があって、これは大いに私の嗜好に投じるものであった。頼まれば喋って、今日までにその数を知らない。²⁶

→基本的な共通点、多少の違い、対談者同士が啓発しあえる関係にある時に、生き生きとしたものとなる²⁷

そのため、対談の内容が相手への評価につながる

例：江藤文夫への評価

彼は常に話題の豊富な話し手であったばかりでなく、相手の言ったこと及び言おうとしたことを、ただちに正確に理解するすばらしい聴き手でもあった。私は彼との会話を愉しみ、そこから多くのことを学び、江藤

²² パリ国際大学都市日本館ホームページ (<https://maisondujapon.org/index.html>)，最終確認 2024 年 1 月 10 日

²³ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）353 頁

²⁴ 加藤周一「フランス人の親切について一果たして肝胆相照らしたか」『文芸春秋』30 卷 11 号（1952）102 頁

²⁵ 鷲巣力『加藤周一という生き方』（2012）筑摩書房 152, 159 頁

²⁶ 加藤周一「あとがき」『歴史・科学・現代』平凡社（1973）255 頁

²⁷ 鷲巣力『加藤周一という生き方』（2012）筑摩書房 152 頁

文夫の代表的な作品は、彼のさりげない雑談ではないかと考えている²⁸。

※対談関連の本も盛んに出版される

『歴史・科学・現代：加藤周一対談集』、『二十世紀から』（鶴見俊輔との対談）、『漢字・漢語・漢詩：雑談・対談・歓談』（一海知義との対談）、『加藤周一対話集』、『居酒屋の加藤周一』etc.

→対談を重視するきっかけとして、フランスでの「ブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとり」との対話がある

第5段落（旧版48-50頁、新版55-56頁）

しかしブルターニュの青年とのつき合いから私が得たのは、議論をする習慣だけではなかった。私はフランス語を話しはじめると同時に、フランス語の文章を私がそれまで読んでいなかったということも発見した。彼はヴァレリーが対話体で書いた『ユーパリオス』を、私のために注意深く読んでくれた。何故著者がその場所にその語を用いて他の語を用いなかったか、何故その言廻しを採って他の言廻しを採らなかったか。そういう議論に、仏和辞典はほとんど全く役に立たない。嘗て私は東京で、仏和辞典を用い、英訳を参照し、その本をかなり丁寧に読んで、理解したつもりでいたが、私が理解していたのは、すじ書きにすぎなかった。私は東京で、ヴァレリーを読んで理解することはできるが、フランス語で話をするにはむずかしい、と思っていた。パリの大学町では、フランス語で話をするには大してむずかしくないだろうが、ヴァレリーを読むのは容易でない、と考えるようになったのである。日本について、彼はしばしば一つの質問をくり返した、「日本語の文章にも、フランス語の場合と同じ意味で文体と称すべきものがあるのか」-「全く同じ意味では、ないかもしれぬ、しかしそれに該当するものがある」という答えは、彼を満足させなかった。日本語における文体の概念をどう定義することができるか、という面倒な話が、そこからはじまらざるをえなかった。彼の仲間の中には、小説を書きはじめている青年もいたが、彼自身は、十分に満足できる文章を書くことができるようになるまで、拙い文章で創作を試みる気はない、といていた。そういう彼の態度は、私にしばしば私自身の二〇歳前後を思い出させた。おそらく私ははるかに広くロシアの小説家やフランスの詩人やドイツの哲学者を知っていたと思う。しかしフランスの青年が母国語とその古典にむすばれているほど確かな絆で、日本語とその古典にむすばれてはいなかったろう。私の文学的教養は、国際的に横に拡って浅く、彼の教養は自国の歴史を縦に通して、深かった。私はそういう対照から強い印象を受けた。はるか後になって、『雑種文化』という文章を書き、日本の状況に潜在している可能性を強調したときに、私は大学町でのその経験を思い出していた。私は横に幅広い教養を「雑種」とよび、縦に深い教養を「純粋種」と名づけ、現代の日本人にとってはもはやその二つの型のどちらかを選択する自由はなく、したがって「雑種」の型に積極的な意味を見出すほかはない、と論じたのである。

① 作品内世界での出来事の事実考証

● 『ユーパリオス』…ヴァレリーによって1921年に出版された『エウパリオス』

ソクラテスとその弟子（パイドロス）との建築家エウパリオスをめぐる対話を通して、芸術と哲学とのつながりについて語る

²⁸ 加藤周一「夕陽妄語 『江藤文夫の仕事』について」『朝日新聞』夕刊2006年7月18日6面

- 「嘗て私は東京で、仏和辞典を用い、英訳を参照し、その本をかなり丁寧に読んで、理解したつもりでいた」
・一高生時代に、中村真一郎などと一緒に輪読する
「加藤周一さんも中村真一郎さんと一緒に十六年の夏、旧軽井沢の辰雄を訪ねて来た一人で、その頃はまだ大学生だった。(……) はつきり思い出せないが、福永(武彦)さんや野村(英夫)さんも加わってヴァレリーの『ユーパリノス』を輪読するのを、私もそばで聞いていた記憶がある。²⁹⁾
・フランス滞在中に使っていたと考えられる、タイプ印刷された『エウパリノス』が現存³⁰⁾
→読んでいたのは確か

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 渡仏前後での加藤のヴァレリー読解の変化
・渡仏前の加藤…「私は東京で、ヴァレリーを読んで理解することはできるが、フランス語で話をするにはむずかしい、と思っていた。」
→辞書をもとに、書いてあることの意味を理解する⇔日常会話
・渡仏後の加藤…「パリの大学町では、フランス語で話をするには大してむずかしくないだろうが、ヴァレリーを読むのは容易でない、と考えるようになったのである。」
→フランスでの文脈に沿って「精読」すること⇔日常会話
(フランス語特有の文脈を知っていないと、理解することが不可能)

- 「文体」に関する加藤と「ブルターニュの青年」との会話
「ブルターニュの青年」…「日本語の文章にも、フランス語の場合と同じ意味で文体と称すべきものがあるのか」
・ヨーロッパでの「文体」…古代ギリシャ～中世→修辞学(レトリック)と作品主題とジャンルが対応
ロマニズム以降→作家の個性の数に応じて多種多様であるという独創性が強調³¹⁾
フランス文学では、「フランス語の表現価値や表現効果を探求」する文体論と「作品の独創性を重んじ、その固有の言語的特質から作品にアプローチ」する文体論がある³²⁾。(相補的な関係)
(言葉に関するものなのか、個々の作家に関するものなのかは不明だが)表現に一定の規則を聞いている？

- ・加藤「全く同じ意味では、ないかもしれぬ、しかしそれに該当するものがある」

→日本語にも「文体(style)」があるかどうか

※渡仏前にも「文体」への関心はある

例:「文体論」『文芸』(1948)掲載

ヨーロッパ近代の散文は、社会的論理的なラテンの文体と孤独な情念の表現であるゲルマンの文体との両極端を含むが、何れも日本の散文の歴史には缺けてゐた要素である。しかし、問題は文体にとどまらず、散文の形式は精神の形式に他ならないから、一般に精神生活の構造に係り、嗜好の方法と感受性の性質とに係は

²⁹⁾ 堀多恵子『堀辰雄の周辺』角川書店(1996)181頁

³⁰⁾ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか:『羊の歌』を読みなおす』岩波書店(2018)354頁

³¹⁾ 中山真彦「文体」『デジタル版 集英社世界文学大事典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-01-19)

³²⁾ 田島宏「(1) 文体論:(第2部:文学と言語学の接点) フランス語研究の問題と方法」『フランス語フランス文学研究』11巻(1967)110頁

るであらう。ラテン諸国殊にフランスの社会と幾何学的精神、ドイツ人の孤独と観念論哲学を産んだ神秘主義的体験、——それぞれの文体は、それらの前提の上のみ可能であり、それらの前提を離れて文体のみを所有することはできない³³。

→文体とその国の「精神構造」との関係に注目

日本の場合も同様（ただ、肯定的に評価しているのは、「欧化」以前の文体に限られる）

ヨーロッパの修辞法に接するまでの日本の散文には三つの要素がある。その第一は所謂和文脈であり（……）第二は所謂漢文脈であり（……）第三は、（……）地域によって著しく異なり、時代によって激しく変化する高度文の系統である。（……）日本語の構造を分析することが、日本の意識構造を、従って又文体の構造を分析するために必要な前提であるかもしれない³⁴。

→過去の事例を分析できても、明治時代から続く同時代の「文体」を評価することは難しい³⁵

● 「小説を書きはじめている青年」と「二十歳前後の」加藤周一との対比

・「フランスの青年」（「ブルターニュの学生」、「小説を書こうとしていた学生」）…自国（フランス）の歴史に縦につながっている

・「二十歳前後の」加藤周一…比較的、国際的に横に広がった関心

例：「青春ノート」に出てくる文学者

外国文学…ロシアの小説家（チューホフ）、フランスの詩人（ヴァレリーなど）、ドイツの哲学者（カント）など多岐にわたる

日本文学…藤原定家「拾遺愚草」、源実朝「金槐和歌集」、『万葉集』

→同時代の加藤の小説は、古典文学とのつながりは薄い？³⁶

また、「美しい文体」を書いた作家は日本文学の古い伝統に学んでいることも、既に意識³⁷

③ 加藤周一の人生における意義

・日本語の「文体」への興味…小説以外にも拡大、「文学史」の一部に

³³ 加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和 25 年度版』中央公論社（1950）33 頁

³⁴ 加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和 25 年度版』中央公論社（1950）33-35 頁

³⁵ 例外的に、森鷗外の文体については、「殊に史伝に於て、観文脈の簡潔で美しいリズムを最高度に生かしながら、ラテン的明晰をその概念と修辞法とに与へた。」と評価している。こうした評価は、『日本文学史序説』でも「日本語の三分の一つの文体を完成した。それは、漢文と欧文との表現の特徴を微妙に織り合わせた基礎の上に、口語体の散文を高度に洗練してなったものである。その完成の時期は、およそ、彼が歴史小説を書き始めた時期と一致する。」という部分と重なるところである。

加藤周一『日本文学史序説 下』筑摩書房（1999）336-337 頁

加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和 25 年度版』中央公論社（1950）37 頁

³⁶ こうした加藤の小説に対する背景となる「骨格」の不在は、同時代の評論家にも指摘されている。「加藤君の小説を一つ読んだが、なかなか気どったスタイルで甘い抒情詩を小説の形に置きかえたような、スタイルだけで骨格のない感じだった。」

栗林農夫；久保田正文；岡本潤；壺井繁治；秋山清「詩の言葉の美しさについて(座談會)」『コスモス』10号 20 頁（1948）

³⁷ 加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和 25 年度版』中央公論社（1950）36 頁

例：福沢諭吉と中江兆民の文章

福沢は見事な口語文を書いた。(……) 兆民は文章においてしばしば漢文を用い(『民権訳解』『三酔人経綸問答』1887、など) 日本文で書くときにも漢語を駆使するのを憚らなかった。伝統的文化に対しては、福沢の態度の方が、兆民のそれよりも、徹底して革新的であったといえる³⁸。

→文章(文体)から、その人の文化に対する態度を明らかにする。

● 「雑種文化」を著すきっかけの一つ

例：「雑種文化」の前提にある問題意識

・「西洋見物」の途中で考えた、「日本人は日本人の立場にたたなければならぬという原則、つまり日本の西洋化を目標にして仕事をして日本問題は決して片付くまい」という原則から、「日本人の立場とは何か」という問いを立てた際に、「西洋の影響が技術的な面を除けば精神の上でも文化の上でもいたって表面的な浅薄なものにとどまっている」ことから、その内容を「西洋の影響のない日本的なもの」と考えた³⁹。

・英仏の場合は、その国の特色が学問、芸術から服装、生活様式の末端まで及び、かつ長い歴史に負っている。

⇔

・医学や美術は外国式で生活様式は日本⁴⁰

→日本文化を比較するための視点として、西欧の価値観を知るきっかけとして、「ブルターニュの青年」との会話がある

³⁸ 加藤周一『日本文学史序説 下』筑摩書房(1999) 260頁

³⁹ 加藤周一「日本文化の雑種性」『加藤周一自選集2』(2009) 3-4頁

⁴⁰ 加藤周一「日本文化の雑種性」『加藤周一自選集2』(2009) 4頁